

名鑑・和歌山の音楽家たち

徳川頼貞が東京・飯倉で南葵音楽図書館(南葵音楽文庫)の運営に心血を注いでいたころ、周囲には彼と同じく音楽を愛し、音楽の道に生きることをこころざしていた若き人びとがいました。近代日本の成立とともに西洋音楽がもたらされて半世紀余り、導入当初は新奇な響きに途惑っていた人びとも次第に西洋音楽を楽しむようになり、日本近代芸術の重要な領域を占めるようになります。創造的な音楽活動をめざす若き人びとの台頭、それは「与えられた音楽」を自らの音楽へ創り直す過程でもありました。徳川頼貞と南葵音楽図書館の時代をともに生きた音楽家たち、そのなかから特に和歌山ゆかりの人びとを紹介します。それぞれ作曲、演奏、研究、教育の分野で活躍した音楽家たちです。

日本近代音楽史地図「和歌山県」に注目!!

(林淑姫、本文とも)





本居長世

(1885-1945)

作曲家

別名：長豫、一浩

MOTOORI Nagayo

東京下谷に生まれ、祖父本居豊穎（1834-1913。和歌山本居家第四代当主）のもとで育つ。東京高等師範附属小学校、獨協中学を経て、東京音楽学校に入学。1908（明治41）年本科器楽部（ピアノ）を首席で卒業。1910年助教授就任（ピアノ、和声学担当）とともに、邦楽調査掛調査員を務める。本科卒業の頃より作曲を始め、ピアノ曲《数へ歌ヴァリエーション》（1909）、オペレッタ《歌遊びくうかれ達磨》（1912）などで高い評価を得た。

1920（大正9）年より童話雑誌『金の船』（『金の星』）に童謡作品を発表。野口雨情とのコンビによる《十五夜お月さん》（1920）、《七つの子》《赤い靴》（1921）などの名作を残す一方で、わらべうたの研究にも手を染め、宮城道雄、吉田晴風らとともに「新日本音楽」運動を起した。本居長世は近世邦楽の音階や旋律法に工夫を凝らし、西洋音楽の技法を駆使することによって新しい作品世界を表出した。歌曲「白月」（1921）、童謡「十五夜お月さん」（1920）などの作品に特徴的に見られるその手法は、鋭敏な言語感覚が支える日本語歌詞の扱いとともに、作品に独特の陰影と情感を与えている。

1909年慶應義塾長で紀伊徳川家相談役でもあった鎌田榮吉夫妻の媒酌により結婚。妻幸枝との間にもうけた3人の娘たち—みどり、喜美子、若葉—は歌唱にすぐれ、ステージをはじめレコード、放送にも活躍、のち戦後にかけて続出する「童謡歌手」たちの先駆となった。長世の童謡のほとんどは愛娘によって初演されている。終戦の年の秋、肺炎により死去。享年60。作品は声楽曲を中心におよそ650曲にのぼる。

紀伊徳川家と親しく、東京音楽学校助教授時代に頼貞、



金田一春彦著
『十五夜お月さん 一本居長世 人と作品』
三省堂 1983年刊



「十五夜お月さん」が掲載された
『金の船』第2巻第9号
（大正9年9月号）

治兄弟にピアノ、和声を教え、治急逝（1913）の折に挽歌「涙の幣」を捧げている（頼貞の師E.ネイラー指揮によりケンブリッジで初演）。国内初演は1915（大正4）年1月徳川頼貞邸で開かれた「徳川頼貞帰朝音楽会」（作曲者指揮）。この演奏会の本居長世の最初の作品発表会でもあった。

徳川 治

(1896-1913)

TOKUGAWA Osamu

徳川頼倫の三男。1913（大正2）年2月、学習院中等学科の馬術訓練中に落馬。重傷を負い、3月1日逝去。学業成績もよい聡明な少年であった。早くから音楽に関心を寄せ、4歳違いの兄頼貞とともに本居長世にピアノや和声の手ほどきを受けた。仲のよい兄弟でピアノの連弾なども愉しみ、兄の学友たちと連れだつてバンドマン一座のオペレッタ公演を見に出かけることもあった。南葵音楽図書館蔵書には、治が所蔵していたサイン入りの楽譜も収められている。



涙の幣

（混声四重唱）

吉丸一浩作歌
本居長世作曲

【弟治の死】私は学習院に通学の傍ら、その頃音楽学校の助教授で、旧和歌山藩出身の本居長世氏（今日の長塚氏）から和聲學と対位法を習つてみた。然し、弟の急逝は私に強い衝撃を與へて暫くは學科も音楽も手につかなかつた。私はただ茫然と日を過すのみであつた。

（徳川頼貞『蒼庭樂話』1941、1943）

【《涙の幣》初演を伝える】徳川頼貞氏の談によれば、本居長世氏作曲「涙の幣」（吉丸一昌作歌）は、劍橋大學のドクトル ネラー氏の非常なる稱賞を得て、同氏の率ゐる大合唱團によりて演奏され、歌詞も日本語のまゝに合唱されたといふ。外國に於いて教育ある好樂者團體の好尚をそゝり、日本語をもつて唱謠されたるは、これが蓋し最初の記録なるべし。

東京音楽学校学友会誌『音楽』7巻3号（1916.3）

【《涙の幣》作者解説】當時吾がピアノの教へ子なりし徳川頼貞氏の令弟治氏の不慮の死を悼み捧げたる曲。莊嚴に且つしめやかに歌はるべき哀悼曲也。

山田耕作（耕筈）編『日本合唱曲集』（世界音楽全集第6巻、春秋社、1930）

なみだはなみだのちるにまか
 せよあああ あああ - ああなみ
 たてまつるなみたをぬさにてたてまつるなみたを
 たてまつるなみたをぬさにてたてまつるなみたを
 いたくそや きみかみ たま



澤崎定之

(1889-1949/有田)
 声楽家(テノール)
 指揮者、音楽教育

SAWAZAKI Sadayuki

1912(明治45)年東京音楽学校本科声楽部卒。1914(大正3)年同校研究科修了。1929(昭和4)年より東京音楽学校教授。1924(大正13)年ベートーヴェン「交響曲第9番(合唱付)」の独唱者を務めるなど、ソリストとして活躍するとともに母校の声楽科主任として多くの俊英を育てた。門下に戦後の声楽界をリードした木下保、畑中良輔などがいる。合唱指揮者としてもすぐれ、東京音楽学校合唱団を率いて内外の名曲の紹介にあたった。黎明期の日本近代音楽を牽引した音楽家のひとり。著書『基礎唱歌法』(1934)、『唱歌法—正しく美しい唱歌の基礎』(1949)など。



眞篠俊雄

(1893-1979/新宮)
 オルガニスト
 音楽理論

MASHINO Toshio

1917(大正6)年、東京音楽学校本科器楽部(オルガン)卒。同年研究科に進級。1920~24年ベルリン高等音楽学校に学び、ベルリン大聖堂のオルガン奏者を務めていたヴァルター・フィッシャー(1872-1931)に師事。日本で最初の本格的なオルガニストとして注目される。帰国後は母校の教授を永く務め、戦後は玉川大学、洗足学園音楽大学などで教鞭をとった。著書に『音楽通論』(1931)、『オルガン奏法』(1934)がある。戦後の1949(昭和24)年に刊行された音楽の基礎理論書『楽典』は名高く、1970年代まで版を重ねた。



眞篠俊雄著『楽典』
 音楽之友社 1949(昭和24)年
 (23刷 1968年)刊



竹中重雄

(1904-1993/紀三井寺)

作曲家、音楽教育

TAKENAKA Shigeo

1931 (昭和 6) 年、東京音楽学校師範科卒。台南州立嘉義高等女学校 (現国立嘉義女子高級中學) に教諭として赴任。赴任早々より原住民「高山族」の民謡の採集に着手し、その成果を国内の音楽雑誌に次々に発表した。帰国後の 1935 年『台湾蕃族の歌 第一集』として刊行。その頃、神戸市立第二高等女学校 (現神戸市立須磨高等学校) 教諭を務めた。戦後は和歌山県立桐蔭高等学校で教鞭をとり、1948 (昭和 23) 年、同校校歌を作曲。同時期に和歌山フィルハーモニック・ソサエティー委員長も務め、《和歌山県民歌》(西川好次郎作詩、山田耕作作曲) 制定に尽力。校歌や市民歌のほかに、童謡の作曲も手がけ、《山かつぎ》(北原白秋詩)、《ちひさなちひさな水車》(サトウ・ハチロー詩) などは、1931 年に刊行された山田耕作 (耕作) 編『日本童謡曲集 III (世界音楽全集第 22 巻)』(春秋社) に収録されている。晩年は和歌山市内で音楽教室を主宰。



竹中重雄採譜・編
『台湾蕃族の歌 第一集』
不倒楽社 (大阪)
1935 (昭和10) 年9月刊
前田藤四郎装幀



竹之内喜八郎

(1907-1945)

作曲家、音楽教育

TAKENOUCHI Kihachiro

群馬県前橋市生れ。1927 (昭和 2) 年より群馬県内の尋常高等小学校訓導を務める。1930 年、東京音楽学校に付設されていた音楽科教員のための第四臨時教員養成所に入学。オルガン、音楽理論を眞篠俊雄に、唱歌を澤崎定之らに師事。卒業後和歌山県立和歌山高等女学校教諭を務めた。養成所時代から作曲を手がけ、群馬童謡詩人

会、和歌山童謡詩人会の同人たちの作品に作曲して発表。1939 年「社団法人大日本作曲家協会」(1925 年小松耕輔、本居長世らにより設立) に入会、歌曲《幾山河》(若山牧水詩) を発表している (『日本作曲年鑑昭和 16 年版』共益商社書店、1943 年刊)。終戦直前に応召、朝鮮半島北部で戦死。2022 (令和 4) 年、自筆譜を含む関係資料がご遺族より和歌山県立文書館に収められた (和歌山県立文書館『和歌山高等女学校教諭竹之内喜八郎資料』)。



原智恵子

(1914-2001)

ピアニスト

HARA Chieko

原家は代々紀州藩士の家柄で、智恵子の曾祖父原喜八は、幕末期、来航する外国船の大阪湾侵入を防ぐため設けられた友ヶ島奉行所の同心であったと伝えられる。智恵子は神戸に生まれ、横浜で育った。幼少時よりピアノを習う。来日したフランスのピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックスに認められ、1928 (昭和 3) 年、13 歳のとき、父の友人の画家有島生馬に連れられパリに渡り、ジル＝マルシェックスに紹介されたエコール・ノルマルで学んだのち、パリ音楽院に入学してラザール・レヴィに師事した。徳川頼貞はエコール・ノルマルでコルトーの試験を受けている智恵子の演奏を聴き、その才能と伎倆に感心している。1932 年音楽院を首席で卒業。同年中に一旦帰国し、東京でデビュー。1937 年、日本人として初めてショパン・コンクールに参加し、「特別聴衆賞」を得た。戦中は結婚したこともあり日本で活動したが、1950 年代に再び渡仏し、ヨーロッパでの演奏活動をはなやかに再開した。1958 年にスペイン出身の名チェリスト、ガスパール・カサド (1897-1966) と再婚したあとは、夫の伴奏ピアニストとしても活躍した。夫の歿後 20 年を経て、1990 (平成 2) 年に帰国。夫妻の旧蔵資料は玉川大学教育博物館に収められている。(ポートレートは玉川大学教育博物館「ガスパール・カサド、原智恵子コレクション」蔵。題字面も)



寺崎太二郎著
『原智恵子』
冬花社 (鎌倉) 2021 年刊



2023年3月5日

photo: 佐本守

①和歌山の音楽史を発掘する：その試みと今後

奥中康人 (静岡文化芸術大学教授)

江本英雄 (和歌山地方史研究会会員)

林淑姫 (旧日本近代音楽館主任司書、南葵音楽文庫研究員)

司会 近藤秀樹 (大阪教育大学講師、南葵音楽文庫研究員)



「鼎談」の第一弾は「和歌山の音楽史を発掘する：その試みと今後」。メンバーは奥中康人、江本英雄、林淑姫の三氏。奥中氏は、前日の講演に引き続いて鼎談にも参加していただきました。会場からのサプライズ発言もあり、いろいろと収穫の多い鼎談となりましたが、ここでは司会担当の私の立場からポイントとなりそうなことをまとめてみます。

南葵音楽文庫の研究は、もちろん文庫に収められた資料の研究がメイン。ですが、そこからだんだんと視野を広げていくと、文庫にたずさわった和歌山の人たちや、和歌山の音楽文化が視野に入ってきます。江本氏による和歌山の唱歌の研究も、大きく見るならこのような流れの中に位置づけられるでしょう。

奥中氏の発言にもありましたが、従来の音楽学・音楽史の研究は、何といても偉大な作曲家とその作品が中心でした。しかし、演奏団体や愛好家の団体や楽器メーカーなどを抜きにして、音楽文化は成り立ちません(この点で、当日、フロアから神谷氏にご紹介いただいた和歌山労音のコンサートのプログラムは、戦後のものとはいえ、たいへん興味深い資料でした)。そう考えると、文庫の研究のすそ野が広がるにつれて和歌山の音楽史が—唱歌や楽器や演奏団体が—視野に入ってきたことは、むしろ自然なことであり、研究の方向性としても望ましいことと言えます。もちろん、文庫とのつながりを大切にしながら広げていくことが大原則ですが、すそ野を広げたくうえで文庫をもう一度眺めてみたら、文庫自体に関しても新たに増えてくるものがあるのではないかと思います。(近藤秀樹)

👉 しました。和歌山に向けて、日本と世界にむけて、また未来に向けて、南葵音楽文庫を活かすみちの探求は、これからも続けなくてはとの思いを、あらためて強く感じた鼎談でした。(美山良夫)

②南葵音楽文庫を活かすみち

宮下直子 (ピアニスト、相愛大学講師)

岩橋和廣 (LURUMUSIC)

美山良夫 (慶應義塾大学名誉教授、南葵音楽文庫研究員)



2017年12月、南葵音楽文庫の公開が始まり、同時に県立博物館ではベートーベンの自筆など貴重資料の企画展が開催されました。はじめに、宮下直子、岩橋和廣両氏から文庫が和歌山に寄託されると知ったときの感想、そこから新しい活動を期待し、音楽を軸にした交流機会、地方紙への連載開始などを回顧、ついで文庫の和歌山移管決定時に所蔵者である(公財)読売日本交響楽団の理事であった筆者の驚きと期待を紹介しました。

公開から2年あまりの間、毎週、南葵音楽文庫閲覧室で開催されたミニレクチャーは、コロナ禍で最後の数回は中止になったとはいえ、多くの刺激が与えられたそうです。主催側のひとりとして、かなり専門的なテーマに当初心配もしましたが、杞憂であったようです。来会者の関心の高さに支えられました。

岩橋和廣氏は、文庫関係の作品の録音のため、LURUホール使用に便宜をはかっていただき、また文庫の和歌山移管を迎えるかたちで始まった「とらふすクラシック」(「わかやま新報」に毎週掲載)が300回を迎えると報告されました。それを受けて、宮下氏からご自身のプロデュースで、記念コンサート「徳川頼貞が愛した音楽」を6月に開催するとのご紹介がありました。

文化的な活動は一過性のものではなく、一世代、すなわち30年程度とかのスパンで見るとべきであるのに、公開5年で云々はとも思います。しかし、南葵音楽文庫と和歌山の繋がりは内外に知られるようになっており、今後にも期待したいところです。

会場からも貴重な提言がありました。南葵音楽文庫ミニレクチャー復活の要望でしたが、次年度の予算から実施は困難な状況にあり、その旨説明しました。鼎談当日はそれで終えたのですが、数日以内に研究員が協議し、再整備した閲覧室と所蔵資料を活用した「南葵徳川音楽塾」を設けることになりました。この音楽塾については、別項をご覧ください。

あわせて、和歌山で開催されているアカデミーを、編集のうえ映像公開する事業を本格化するとお伝え👉

南葵徳川音楽塾の開塾



南葵徳川 音楽塾

5月28日、南葵音楽文庫閲覧室を会場に、あらたに「南葵徳川音楽塾」が開塾した。同閲覧室では、2017年12月から「南葵音楽文庫ミニレクチャー」が毎週開講され、コロナ禍で2020年3月に中断されるまで、その数およそ130回に及んだ。まずは南葵音楽文庫について、所蔵資料について、徳川頼貞について紹介するレクチャーが続いた。爾後3年。この間に、同閲覧室は、徳川頼貞が館長をつとめた「南葵音楽図書館」時代の所蔵資料による特別な空間に変わった。

「南葵音楽図書館」の時空のなかで 徳川頼貞自身が蒐集した重厚な楽譜や書物が壁面を埋め、彼の理想と熱意が、世紀をこえて伝わる閲覧室には、大きな机と8つの椅子があるのみ。この小さく濃密な空間に集い、学ぶに相応しい名称は「塾」。音楽文庫名から南葵、館長の徳川と合わせ「南葵徳川音楽塾」とした。

要望から開塾まで コロナ禍が終熄に向かうなかで、ミニレクチャー復活を望む声は、研究員にも届き始めていた。3月5日、南葵音楽文庫アカデミーの一環としておこなわれた鼎談(別欄に報告掲載)でも、フロアから要望の声が上がった。他方、予算上令和5年度のレクチャーは、9月、3月のアカデミー各1日のみであり、模様替えした閲覧室を活かした事業は含まれていなかった。

そこで研究員は急遽協議、今年度に限って『紀要』の原稿料を辞退し、それをもって音楽塾の開催にあてることにした。

音楽塾のセミナー ファシリテーターが、テーブルを囲む参加者との対話や資料読解をすすめながら、テーマとシラバスにそって、より深い理解をサポートするのがセミナー。ほぼ一方的な講述となるレクチャーとはことなり、各参加者の関心や知識に応じて学ぶ機会になる。所蔵する南葵資料の熟覧が可能というメリットを最大限活用できよう。また関連画像・映像の熟視、あるいは音楽作品の熟聴などをまじえるため、90分という枠をとっている。

南葵音楽文庫という軌からは自由にテーマを設けつつも、南葵の貴重資料を利用して進める。2018年に一旦計画、コロナ禍で会場を変更したため、レクチャー形式に変更した経緯があり、今年度回数が少ないがようやく実現に至った。

小さな閲覧室からの大きな広がり この閲覧室のレクチャーに参加できない人のため、今年度後半のレクチャーは、zoomを介して各地で同時に視聴できるよう計画中。小さな閲覧室から、県をこえて南葵音楽文庫の魅力を伝えられるようになることが望まれます。(美山良夫)

2023年度【5~9月】スケジュール

<レクチャー> 11:00~11:45

5月28日(日) 開塾にあたり/徳川頼貞の「音楽を聴く喜び」
美山良夫ほか

6月17日(土) 「鋼鉄の腕」が奏でる抒情~プロコフィエフを聴く
近藤秀樹

7月8日(土) 南葵音楽図書館の蔵書形成(その1)
林淑姫

8月6日(日) B.マルチェッロ《詩と音楽の靈感》
~カミングス文庫から隠れた名曲を聴く
佐々木勉

9月10日(日) 聖セシリアの祝日のための頌歌
~H.パーセルと宮廷行事
佐々木勉

<セミナー>

6月2日(金)13:30~15:00
3日(土)10:00~11:30

歌詞をきわめる—《夏は来ぬ》と《荒城の月》
美山良夫



南葵徳川音楽塾
5/28 開塾の様子

令和5年度 南葵音楽文庫アカデミー

今年度の南葵音楽文庫アカデミーは、南葵紹介映像の収録をかねて、下記の日程で開催を予定しています。詳細は追って発表します。なお、3月3日は重要資料報告会も開催します。

2023年9月9日(橋本市)

10日(和歌山県立図書館)

2024年3月2日(新宮市)

3日(和歌山県立図書館)



<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/academy/>

牧野富太郎と徳川頼倫

NHKの連続テレビ小説「らんまん」のなかで、主人公が教授室に置かれた楽譜に注目するシーンがありました。当時の楽譜を多数所蔵している機関は他にほとんどないため、依頼により、南葵音楽文庫の楽譜から選び、番組ではそのレプリカ(複製)が使用されました。

牧野富太郎は、自身が出版した図譜を、史跡名勝天然記念物の保護につとめていた徳川頼倫に贈っています。その一部で、牧野富太郎の献辞が記された巻を、和歌山市立博物館が所蔵しています。



番組に提供された所蔵楽譜

南葵文華第9号

令和5年7月10日発行

発行所
和歌山県立図書館
〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集
合同会社芸術資源研究所
〒640-8137 和歌山市吹上1-1-22 502号室

編集協力
有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町楢36